

真宗における女人往生論の再考 ―蓮如教学に注目して―

龍谷大学 文学研究科博士後期課程 岩崎 慧

(1)はじめに

LGBTQ+といったジェンダーに関する問題が近年より注視されている中で、仏典に説かれる「女人往生・成仏論」はどのような教義的解釈がなされ関わっていくのか。特に浄土真宗の立場においては如何に応答していく必要があるのか、伝道の現場においてはどの様に説明すべきか、という教学的関心がある。本研究ではその様な真宗の女人往生論の中でも、特に蓮如の説いた女人救済に注目し、現代の視点から見た場合、蓮如の説いた女人の救いの論理構造のどこが評価されるべきか、また問題があったのかについて考察していきたい。

(2)蓮如の女人救済への熱意

蓮如の女人往生に関する言及は親鸞のものとは比べ物にならない程に多いが、何故か？

- ①内的要因としては生母との別離や相次ぐ女性家族との死別といった蓮如自身の出自がある。
- ②外的要因としては男尊女卑の家父長制が定着しつつある時代であったこと、『血盆経』の流行により一般民衆の間で女性劣機観がより展開したこと、また浄土異流からの影響や、差し迫る一揆に向けて女性にも「後生の一大事」を強調する目的があったこと、教団のトップとしての意識がある。

(3)蓮如の説いた女人救済の意義・課題

- ①意義：蓮如は女性に対しては、「五濁悪世の衆生といふは一切我等女人・悪人」と説く様に、「われら」という立場をとり、また「無常観」という視点から見つめ続けることで、自らを含めた全ての人間が同じ罪深きものであること、無常観の自覚を力説して、何ら差別のない共に一仏浄土を目指す仲間（御同朋）であるという、一体感をもたらす救済を説き、女性に往生成仏の確証を与えた。
- ②課題：蓮如教学では「女人の身は、五障・三従とて、おとこにまさりてかゝるふかきつみのあるなり」と述べ、本来蔑視的思想である「五障三従」を否定しきらず、機の深信として女性に信知させ女人悪人観を肯定しており、現実社会で受ける女性の「不利」を根本的に否定せず、「不当」であるという認識が不成立のまま、阿弥陀仏の絶大なる力による救済を強調して女人の成仏を保障するだけのものであった。

(4)結論

伝道の中では、親鸞や蓮如の説いた女人の救いに含まれる平等性を「味かう」だけの立場になってしまいがちであるが、批判的論理を持たず、こうした立場に留まることは差別の再生産に繋がりがかねない。また一方で、当時の時代性を考慮せず差別性の批判だけに終わってしまうことは、蓮如の本意や、その根本にある第十八願に基づいた阿弥陀仏の救済の無限定性を無視してしまいかねない。従来の研究でも、蓮如が差別をした・していないという二項対立的な論に終始しているものが多い。伝道においては、蓮如の女人往生論を正しく理解してもらう為に、ジェンダー平等的視点から見れば蓮如の女人往生論には平等性と差別性の両面があると説明することが肝要であり、また二律背反的な視座を超えて、未来に向かって真の平等を志向し続けることが重要である。

【キーワード】 蓮如、女人往生論、二項対立の超克